

◆ 巻頭言

問う文化

フックス 真理子

「ライン川へはどう行きますか」ドイツに住んでいると、この国では外国人である私にも、人々はおかまいなく道を尋ねてくる。

「これ、私が着るのに、ちょっと小さくないかしら？」私が活動しているNPOのリサイクルショップでは、客が黙って物を買って出ていくということはない。必ず何かしら聞いて、会話しながら買い物をする。

「日本では、妻が夫の収入を管理し、夫が小遣いをもらっているという。ドイツでは考えられない！日本で女性の地位が低いというのは、そのことと矛盾していませんか」。これは、とある講演会にて。

ドイツにいて、日本と大きく違うと感じるのは、人々が気軽に質問をすることだ。学校では、質問の応酬で授業が進むことも多い。ドイツの大きな哲学体系も、もとはと言えば、問うことから始まっている。

「質問する」ということは、単に新たな情報を得るという目的ばかりではなく、当たり前のように見えることでも、もう一度問い直すことによって、その不当性、非論理性を明るみに出す行為でもある。面と向かって反対する勇気がなくても、問うことで、逆に相手から、おのずと問題点を指摘させることもできる。

私は、日本人が多く住むデュッセルドルフで公文式教室を運営している。ただし、私の生徒は半数以上がドイツ人や外国人移民の子どもたちだ。先日、夏休みの宿題を渡すとき、2種類の夏休みカレンダーを「どっちがいい？」と私に聞かれた小2のマックス、言下に「どっちがおもしろいですか」と逆に聞いてきた。私の質問を軽くいなし、その質問をこちらに投げ返してくる鮮やかな切り口に舌を巻いた。私たちは、日ごろ聞かれるままに、あまりにもおとなしく相手の意に沿って答えていないか。「問うこと」を、社会のさまざまな場面で、ひとつの戦略として用いることを提案したい。「男女共同参画」も、日常の風景の中で発せられる質問の繰り返しによって、少しずつ前へ進んでいくように思う。



PROFILE

フックス 真理子
(ふっくす まりこ)

上智大学大学院修了、ハインリッヒ・ハイネ大学大学院修了、教育学専攻 (Dr. phil.)。1986年以降ドイツ在住。公文式教室指導者。著書に『ニッポンの公文、ドイツの教育に出会う』（筑摩書房）、『Ewig Üben, Die Pädagogik des Zenmeisters』（Waxmann Verlag）。デュッセルドルフのNPO「ひゅうまねっと e.V.」代表。リサイクルショップ経営を通して地域貢献・開発援助活動に携わっている。